

を語り、食事後は中央アルプスに分布する植物のスライドを見ながら意見交換をおこなった。

翌日(9月11日)は羽広荘を午前8時に出発し、西駒演習林の入口である桂小場前、午前8時30分に当日参加者と合流した。天候は小雨が降っていたが決行し、桂小場からしばらく登ると左岸に西駒ヶ岳登山道があるが、小黒川沿に上流に向かって登ると、標高1250mの右岸沢筋にカシワバハグマの小群落があった。個体数が少ないため採集せず確認するととどめた。附近で花の咲いていた植物を上げると、ハンゴンソウ、ミゾソバ、アキノウナギツカミ、キツリフネ、ヤマゼリ、ヨツバヒヨドリ、ウシノシッペイ、キンミズヒキ、ヤクシソウ、コウゾリナ、クルマバナ、タニソバ、ヤブマメ、ツリフネソウ、オトコエシ、ナギナタコウジュ、ノコンギク、タマアジサイ、ヤマハハコ等であった。

標高1300m地点には上伊那農業高等学校の演習林宿泊施設があり、周囲は実習に利用されているサワラ、ヒノキ、カラマツの林がある。斜面沢筋はウダイカンバ、ミズナラ、ミズメ等の落葉広葉樹林となっている。沿道にはゴマナ、タニタデ、シデシヤジン、セキヤノアキチョウジ、フシグロセンノウ、イナカギク、ノリクラアザミ、コシオガマ、アキノキリンソウ、イワハタザオ等が見られた。

小黒川の右岸から吊橋を渡り、左岸を登るとダムの上にでる。いまひとつ左岸から右岸に渡る吊橋が掛けてあったが、ダムは土砂で埋り吊橋も半分以上埋った状態であった。夏季には信大自然研グループ(学生)が、土砂の間にハクセンナズナと思われる植物をみつけたことを知り、今回の例会を機会にその確認をするために立ち寄って見た。1株ではあったがやゝ大きな石間に生えており、ハクセンナズナの特徴である扁平で線形の果実をつけていたので、同定するには十分であった。茎の先端部分はほとんど枯れていたが、茎の基部からは次年度生長すると思われる根葉が、ロゼット状になっていた。

生育している場所、環境等の状況から推察して、この場所に以前から定着していたものではなく、上

流から土砂と共に流出してきたものと思われた。しかし、このまゝの状態では、いずれ土砂に埋るか流されてしまうおそれがあり、この場所に定着できないものと判断し、土砂の安定した場所に移植することを試みることにした。

株を掘るにあたっては、根系をいためないように慎重にした。清水先生が根系、越冬形態等を詳しく調べた後に、参加者の方々と共生している環境に近い場所を選定し、以後の繁殖を期待しながら移植を終了した。

当地域のハクセンナズナは採集し尽されて絶滅したとも伝えられていたが、小黒川上流域でみつけたことを信州大学農学部演習林報告第1号(昭和32年)に、報告されていることなども考慮して、現在もほぼ間違いなく上流地域に分布しているものと思われる。

標高1350mの沢筋はカラマツの人工林の中に、天然生のサワラが点在し、小群状にサワグルミが生育し、疎開した部分にはヤマブドウ、ミヤマタタビ等のつる性の植物が繁茂している。沿道から林内にはオオヤマレンゲ、ツバメオモト、フウリンウメモドキ、クロクモソウ、ズダヤクシュ、サラシナショウマ、オクヤマコウモリ、カメバヒキオコシ等が見られた。

さらに沢筋を登り、標高1450m地点から水無坂(演習林内の望学台に通じる道)を登ると尾根筋にはサラサドウダン、アキシバ、オオバスノキ、コヨウラクツツジ、ベニバナノツクバネウツギ、ナナカマド、ミズメ、ツバメオモト、イワカガミ、ミヤマシグレ、ゴゼンタチバナ等が多く見られた。

標高1550m地点まで登ると左側にブナとミズナラの大木があり、ここで休憩をとりながら天候の様子を見たが、雨は朝から降り続けているために、目的地の望学台まで登ることを断念し下山することとなった。

桂小場の演習林宿舎に戻って昼食。食事中的話題に、昭和59年度の例会は養命酒の薬草園が候補地に上がったところで、本会は現地解散となった。

〔秋季例会合宿調査報告〕

小路峠・柿其溪谷の植物採集

下野園 正

第98例会は木曽谷でということで、幹事をおおせつけられたが、不首尾が重なり、昭和58年11月11・

12日という、紅葉も終る季節外れのものとなった。場所は木曽郡大桑村、南木曽町界の小路峠を中心に

暖地性植物の北限種の探索を、ひそかな課題とした植物採集会であった。

参加者は、井波一雄、大木正夫、小口好久、奥原弘人、小林富雄、斉藤定美、清水建美、古谷義人、望月精一の諸氏と幹事の総勢10名であった。

第1日の宿泊場所は、大桑村保養センター阿寺荘であった。色々御迷惑をおかけしたこともあったが参加者の皆さんはベテランばかりで話ははずみ、井波先生のハイマツ南限地探索など、熱心なものでした。食堂が少しさわがしくなったのをしおに、かねて用意のスライド上映に移った。演者は大桑村阿寺在住の臼井武人氏で、林試木曽分場庶務課長西尾勝重氏の紹介である。山野草花および木曽エビネ各種併せて500枚のみごとな夢のようなスライドで、豊富な体験から生まれた珍しいものの連続で、驚きの一時を過ぎていただきました。その後も植物分布限界、種名変更の話と次々に出され、井波先生現在進行中の大作、広島県植物図譜の内容、苦労話など夜遅くまで続けられた。

第2日、夜米の大雨も参加者の意気込におされてか、分厚い雨雲もちぎれ勝となり、やゝ遅れた出発時には天気は大丈夫という段階になり、小路峠に向けての採集はじまった。

シロモジ、ミツバツツシ、ツルツゲ、コアジサイ、モミジイチゴ、ウラジロイチゴ、オオミズゴケ、小さい5,6本のニシキゴロモをみつけ、この辺では珍しいと奥原先生がいつておられた。スズカアザミでアザミの話が進む中で、ツチアケビがみつけれ、皆さん写真とりで大変でした。メギのところでは、ヘビノボラズは山口村まで、オオバメギは木曽の奥までいくと奥原先生の解説があった。コウヤミズキは少なくなる。ヒメカンアオイ(斑なしあり)、シラヤマギク、フモトスミレ、ヤマガキ、ヤブコウシ、イイギリなどがあつた。

国有林に入ると植生は乏しくなつてきたが、道端で色々を探し出された。セリバオウレン、キッコウハグマ、キジノオ、コバノイシカグマ(オオカグマと比べること)、ミゾソバ、マツカゼソウ、この辺にシコクスミレがあるということで大分探したが、

時期が悪かつたのかついに見つけれず残念だった。高い木に着生していたクラガリシダを大木さんが採集し、木曾での標本にすると持ち帰られた。ダンドタムラソウ、イノデモドキ、クサアジサイ、スギヒラタケ、ベニバナボロギク(ダンドボロギクを追っかけている)、ヤワラシダ、ヤブムラサキ、ササクサ、タチツボスミレと採集されて峠に着いた。

峠は自然遊歩道だけあつて、小路峠の発声音をとつて恋路峠とシャレて書いてあつた。

下りは面白いのはあまりないということで足は早くなつた。ツルリンドウ、ミヤマウズラ、ヒトツボクロ、ヤマイワカガミ、マキノスミレ(シナノスミレと比べよ)、マルバイチャクソウ、ジンヨウイチヤクソウ、今年は実の少ないウメモドキで柿其溪谷に達した。

つり橋を渡つた駐車場横では、奥原先生かねてから御存じよりのオオバヤシャゼンマイの珍しい群生地で、標本の採集があつた。葉の尖端が先に枯れる特徴を持ち、溪谷沿いにはヤシャゼンマイがあるとのことであつた。

これで大方の目的は達せられたと思われたが、奥原先生は欲張りである。ハナノキを調べ、アザミの群生地を見せるということで、柿其林道を上ることにした。ハナノキは胸高周囲2.33mと測定された。途中きれいな実をつけたイイギリの写真をとり、コウヤマキ、ヤマグルマ、フジシダなどの特徴のある団地をのぞき、柿其川の中流、北沢との分岐点で、待望のキソウラジロアザミの群生地にたどりつき、撮影、採集がなされた。このとき既に上方の尾根は雪で真白になっていたが、この奥にオオヤマレンゲの群生地があるということで、雪の中、遠望することとし、岩倉へ峠超えることになった。途中カモシカ対策試験地の説明もつけ加えておいた。

今回の採集会はまごつくことが多かつたが、場所をすすめて下さつた大木さん、車の移動をバよく御協力下さつた小口さん、斉藤さん、望月さん、現地での解説・討議に積極的に参加された会員の方々に感謝の意をささげます。特徴的なものをもつと明示すべきでしたが、おくみとり下さい。

【新刊紹介】池上義信(監修)・石沢進(編集)「新潟県植物分布図集 第4集」A4判457頁、口絵写真10頁、植物同好じねんじょ会発行(1983年12月)5500円。

本書には251番目のアスヒカズラから350番目のネジバナまで、シダ10種、裸子2種、被子78種の水平・垂直両様の分布図が収められている。巻末の、

410頁以下には石沢氏の「植物分布の類型4」のほか5属の記事があり、分布に関する諸種の知識が満載されている。県境付近では長野県の記録もかなり登載されているので、「長野県植物誌」のデータとしても大いに有効である。この息の長い壮大な仕事の完成を心から祈りたい。(T.S.生)